

「児童・青少年サービス研修」(図書館員対象) 報告

6月24日(木)沼津市立図書館を会場に、公立図書館職員を対象とした児童・青少年サービス研修が行われました。午前は青山学院女子短期大学講師・中村 榎子氏を講師にお迎えし、「子どもの成長と絵本」という題で講義をいただき、午後は研修生全員でブックトークの台本を実際に作成する演習を行いました。

中村先生からはご自身が幼稚園教育に携わっていた経験から、小さな子どもたちがどのように絵本を楽しんでいるのか具体的な事例とともにお話がされました。その一部を紹介します。

- 3歳にならない子どもたちは、日頃の体験を本の中に見つけて楽しんでいる(追体験)。「くだもの」という本では、子どもは知っているくだものが出てくると、「あっ」と指差す。**指をさすということは口から言葉は出なくても、その子の中で確実に言葉が生まれているということ。**その「あっ」を読み手は受け止めてかえしてあげたい(コミュニケーション)。家庭での読み聞かせはあまり地の文にこだわることはなく、言葉で「ああ、そうだね。ちゃん大好きだね。はいどうぞ。」と話してあげてもよい。
- 「遊び」を共有する絵本。「きんぎょがにげた」「たべたのだあれ」「かくしたのだあれ」とこちゃんはどこ」などの**見つけっこ絵本は、コミュニケーションという寄り道をたくさんしながら読み進める絵本。**「もこもこもこ」は音遊びを楽しめる絵本。中には、身体で音を受け止めて、動作遊びに結びついていく子もいる。子どもは**遊びの中に本を見つけ、本の中に遊びを見つける。子どもの中に本が生きている。**
- ページをめくる=ストーリーの流れ。絵の変化に気づき、場面展開を理解するようになる。早い子では1歳で、描かれている登場人物の気持ちがわかるようになる。
- 3歳になると読みが深まってくる。「てぶくろ」では、子どもは絵から時間の流れを読み取っている(空の色、雪の積もり方)。物語る絵と違ってよい。こうした物語では**子どもたちは、自分自身がお話の世界と現実の世界を行ったり来たりしている。**「ちいさいおうち」では交通の歴史や服装の歴史に気づく子どもたちがいる。林明子氏の作品を出版された順に並べてみると、次作に前作の登場人物が必ず出ているが、作者の遊び心に子どもたちは気づくかもしれない。
- 4歳児は、「なぜ?」「どうして?」「知りたい」といった知的好奇心が生まれてくる。そうした時

期に科学絵本や知識の絵本を読み聞かせのプログラムの中に取り入れていきたい。「たべられるしよくぶつ」などは園や学校で子どもたちが体験したことが描かれているので興味もひく。本で追体験できる。また、不条理のおもしろさもこの歳になるとわかる。「ブタヤマさんたらブタヤマさん」など子どもたちが非常におもしろがる。大人にはそのおもしろさはなかなか理解しにくい、不思議なもので、読んでいくうちにわかる。

講義の中の一つ一つのエピソードに「ああ、そうか、そういうことなんだ。」とうなづきながら、熱心にメモをとる受講生の姿が見られました。子どもに本を手渡すには「児童心理学」や「子どもの発達段階」についての知識も必要だということがわかりました。

また、公立図書館員の担当者に対しては「お母さんたちは(最近では園の保育士の中にも)本を選ぶのに悩んでいる人が大勢いる。ぜひ、プロとして声を掛け、本選びの協力をしてほしい。」との助言もありました。

研究室所蔵・図書紹介

『オレンジガール』(ヨースタイン・ゴルデル著)

この夏の高校生向け課題図書に選定されています。4歳の時に亡くなった父からの手紙。オレンジガール(母)と亡き父との出会いの物語を謎解きをしながらたどる主人公。読み手も主人公と一緒に謎解きをしながら読み進みます。

運命と生命、無限に広がる宇宙の不思議と小さなひとつの命に広がる不思議。過去と未来。宇宙の誕生から今までの時の流れを一昼夜にたとえると、人間が登場するのは1日の終わり、最後の2秒。

とりとめもない大きな世界、宇宙の中で与えられた自分自身の生命を考えさせられる1冊です。

イベント・講習会情報

静岡県子ども読書フェスティバル

日時・会場 8月8日(日) 静岡県総合社会福祉会館
講演 「絵本は楽しい」木村研氏(絵本作家)
問い合わせ 静岡県立中央図書館
054-262-1246

静岡県読書推進フォーラム

日時・会場 8月27日(金) グランシップ
講演 「書きなおすこと/読みなおすこと」
大江 健三郎氏(作家)
問い合わせ 静岡県教育委員会社会教育課
054-221-3161